



## 地球温暖化でペンギンが減少？

海氷が消えてエサ減る

南極などの生息地におけるペンギン、オットセイ、アホウドリの減少は、気候変動が原因かもしれないことが最近の研究でわかってきました。

イギリスの南極研究機関が南極のオットセイ、マカロニペンギン、ジェンツーペンギン、マユグロアホウドリの生息数と、作った子供の数を調べたところ、これらの数と、彼らの好物のナンキョクオキアミの量の関係が1980年代以降、おかしくなってきたことがわかりました。オキアミは海上にはりつめた氷の下の海藻を食べていると思われるので、氷が消えたために、オキアミの繁殖力が落ちたのかもしれないということなのです。

オキアミは、海鳥やほ乳類など、海に住む動物たちの多くの主食となる生き物ですが、オキアミは南極海を漂って生活しているので、標本をとって調べるのは難しく、海岸にやってきたオットセイとペンギンのお腹の中の内容物を調べることによって、南極海で食料となるオキアミの量を推定する研究を行いました。

また、4種類の動物の繁殖力を調べたところ、1980年代後半には4種すべてで激しく繁殖率が低下していることがわかりました。動物たちはエサが不足しているわけではなかったものの、作る子供の数は減り、その結果、徐々に生息数が減少していたのです。

アザラシとペンギンがとるオキアミの量と、両者が作った子供の数、およびマユグロアホウドリが作った子供の数には、相関関係がありました。この事実は、これらの生き物にとって、もともとの生息数を維持するほどには好物のエサが足りていないことを示唆しているのかもしれないと示唆しています。

1980年代は、多くの動物を養うのに十分な量のオキアミが生息していましたが、1990年代の初めまでにオキアミの量は十分ではなくなり、オキアミを餌とする動物の個体の数を維持しながら、オキアミの量も維持することはできなくなってしまったと思われ、食う、食われるの生態系にもともとあった緩衝機構がなくなってしまったのではないかと研究者は話しています。

南極海のオキアミとその捕食動物の相互作用は複雑ですが、研究者は、気候変動によって南極の海氷が解けたことが、捕食動物とエサの間のバランスを崩してしまった原因かもしれない、と考えています。

( Nature news service 2001/3/8 )

---

1 「フリティッシュ・アンタークティカ・サーベイ」(本部・ケンブリッジ)